



重要文化財 織田信長像(部分)

狩野元秀筆

天正11年(1583) 寄進銘

縦70.0cm 横31.2cm

紙本著色

長興寺(豊田市)蔵

写真協力 豊田市郷土資料館

肩衣姿の織田信長像です。信長旧臣と考えられる与語(余語)正勝が、織田信長の一周忌に本像を長興寺に寄進しました。

本像は、多くの方が目にしたことがあるでしょうが、もう少し詳しく観ると“信長”に近づけそうです。下着は鮮やかな紅で、白の小袖を重ねています。紅と白のコントラストの効いた組み合わせです。肩衣袴の萌葱と紅も補色となっており、これらは京都でトレンドの取り合わせであったことが指摘されています。織田信長は流行やファッションに敏感だったのでしょうか。

特別展「Gifu 信長展—もてなし人 信長! ? 知られざる素顔—」にて展示

【展示期間 8月11日(金)~20日(日)】

特別展

Gifu 信長展

—もてなし人 信長!? 知られざる素顔—

2017.7.14(金)~8.20(日)

永禄10年(1567)、美濃へと侵攻した織田信長は、稲葉山城に籠もる斎藤龍興を追い落として入城を果たします。その後、井口という地名を岐阜に改めると、天正4年(1576)に安土へと移るまで岐阜を本拠としました。足かけ10年という短い年月でしたが、信長にとって岐阜は飛躍の地となったことでしょう。

ところで、「信長」というと、どのような人物を

イメージされるでしょうか? 「超革新的」「非情・非道」「時代の寵児」…“信長”は、これまで様々な映画やテレビドラマ、小説等できりあげられ、その魅力は多くの人々の心を捉えてやみません。一方、最近では、それらのイメージを大きく転換させるような事実も判明しつつあります。

平成29年(2017)は、信長が岐阜に入城して450年にあたります。本展は、岐阜命名とあわせ、これを記念して、岐阜在城時代に焦点をあてながら、

I 岐阜へ、そして上洛 —信長の心—

II 親交と侵攻 —信長の頭—

III 名物狩りの真相 —信長の目—

の3つのコーナーを設け、信長ゆかりの作品を展覧し真の信長像に迫ります。

ここでは、主な出陳作品を通して本展の見どころを紹介します。



信長が信じ、裏切られた…
武田信玄(晴信)像(部分)
高野山持明院蔵
展示期間: 8/1 ~ 8/20



武田氏を撃破
長篠合戦図屏風
(部分)
犬山城白帝文庫蔵
展示期間:
8/1 ~ 8/20

信玄への3年越しの うらみをつづった書状

重要文化財

織田信長黒印状

細川藤孝宛

永青文庫蔵

熊本大学附属図書館寄託

展示期間: 8/1 ~ 8/20



信長をめぐる人々



信長が憧れた
上杉謙信像(部分)
個人蔵
展示期間: 7/14 ~ 7/30



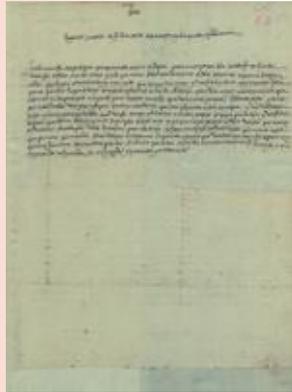
義弟の裏切り
重要文化財 浅井長政像(部分)
高野山持明院蔵
展示期間: 7/14 ~ 7/30



絶世の美女
重要文化財 浅井長政夫人(お市の方)像(部分)
高野山持明院蔵
展示期間: 8/1 ~ 8/20



岐阜を「バビロン」にたとえた
ルイス・フロイス書簡写
ポルトガル国立図書館蔵
展示期間：7/14～7/21



＜特別出陳＞カゴシマからの手紙
フランシスコ・ザビエル書簡
ポルトガル国立図書館蔵
展示期間：7/14～7/21

岐阜のようす



岐阜入城直後に出した
織田信長制札 楽市場宛 円徳寺蔵 当館寄託
展示期間：7/22～8/20



重要文化財 龍図
徳川美術館蔵
展示期間：7/14～7/30

信長が愛でた名品



ルイス・フロイス像(左)
フランシスコ・ザビエル像(右)
(いずれも原本：
ポルトガル 海軍博物館蔵
本展では複製を展示)

南蛮との出会い

南蛮屏風
(原本：ポルトガル 国立古美術館蔵 本展では複製を展示)



加藤栄三・東一記念美術館

第1展示室
加藤栄三・東一
望郷・鶺鴒

2017.7.11(火)~9.24(日)

見る人々を幽玄の世界へと誘う清流長良川の鶺鴒。日本での鶺鴒の起源は中国伝承説と日本発祥説がありますが、いずれも定かではありません。

現在、岐阜市民のかけがえのない財産になっている鶺鴒は、今から約1300年前、鶺鴒を生業とした集団が各務原市那加周辺の出身であると伝えられているのが始まりとされています。

また、鶺鴒は多くの画家の心を動かし、絵画として描かれてきました。岐阜市美殿町出身の日本画家：加藤栄三・東一も鶺鴒に魅せられ多くのスケッチや本画作品を描きました。

毎年、鶺鴒が始まるこの時期に合わせ、第1展示室では、栄三・東一の描いた鶺鴒関連の作品を展示します。



栄三「鶺鴒（総がらみ）」

栄三「鶺鴒（総がらみ）」、東一「総がらみ」は鶺鴒を描いた作品の中で、特に人気が高く毎年展示される作品です。栄三「鶺鴒（総がらみ）」は東洋画の特徴でもある多視点構図と逆遠近法で構成され、篝火に金箔を施してあり、鶺鴒の絢爛さを感じさせる作品に仕上がっています。

東一「総がらみ」は暗闇に浮かぶ金華山

が印象的で長良川を下る鶺鴒舟の華やかさを一層引き立てており、荘厳な感じを受ける表現になっています。

いずれの作品も「総がらみ」という画題のとおり六艘の鶺鴒舟が並んで描かれています。

その他、ご寄贈、ご寄託いただいた作品の中から、裏打ち、表装が済み、展示可能になった作品を初公開作品として展示します。



東一「総がらみ」

芭蕉の句「おもしろうて やがて悲しき 鶺鴒かな」といった豪華絢爛とした後に、火が消えた、あのさみしさと華やかさ。鶺鴒が華やかなれば華やかなほど、ふっとそれが消えた時の、その裏側にある悲しさを表現したいと語っている栄三・東一の作品から、常にふるさと岐阜を忘れなかった二人の気持ちを察することができます。

今年は「織田信長公 岐阜入城・岐阜命名450年記念」の年にあたります。支配者としてのイメージが強い信長ですが、岐阜にいたころの信長は伝統文化を大切にし、来客に対し鶺鴒観覧でもてなしたと言われていました。最近、天皇家や朝廷に対しての支援を惜しまなかった信長の新しい側面がわかりました。

信長が大切に保護したといわれる長良川の鶺鴒は、ふるさと岐阜をこよなく愛した栄三・東一にとっても思い入れの深い光景となっています。

二人の画家が鶺鴒をどうとらえ、その心の中にどのように映ったか、この機会に作品をとおして是非ご鑑賞ください。

兜率天曼荼羅図 誓願寺蔵 が重要文化財に指定されました！

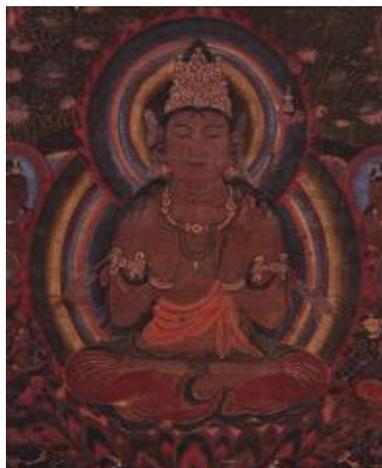
岐阜市伊奈波通の誓願寺（浄土宗西山禅林寺派）所蔵の兜率天曼荼羅図が、新たに国の重要文化財に指定されました。

兜率天曼荼羅図の遺例が少ないこと、鎌倉時代まで遡り得る作品であること、保存状態が良好で、小画面ながら彩色が豊かで截金や金銀泥も堅実であることなどが評価されました。

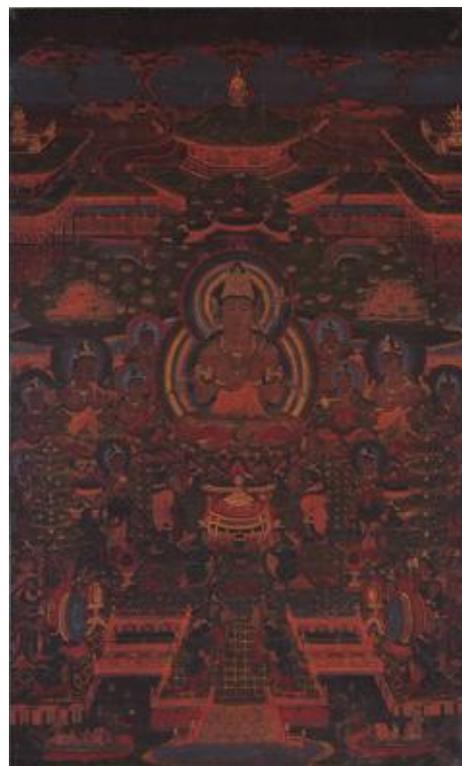
兜率天は欲界（六天－人間界－八大地獄）を構成する六天の内のひとつで、弥勒菩薩の住む世界です。本図はその世界観を描いたものです。

中央に座すのが弥勒菩薩で、左右に十二の菩薩が並んでいます。舞台では楽器が奏でられ、天女が舞っています。手前の宝池には竜頭鷓首の船が左右対称に浮かんでいます。

現在、銀は黒化していますが、制作当時は極彩色の弥勒菩薩の浄土が金銀に輝いていたと想像されます。浄土への往生という願いが込められています。



新指定を記念して**8月8日（火）から8月20日（日）**まで、2F総合展示室にて特別公開いたします。



兜率天曼荼羅図 1幅 誓願寺蔵
絹本着色 縦45.0cm 横27.0cm
鎌倉時代

■分館 加藤栄三・東一記念美術館の展示■

本誌4ページで紹介した以外の分館展示会は以下の通りです。

- 7月11日（火）～8月20日（日） 織田信長公 岐阜入城・岐阜命名450年記念 協賛事業
織田信長～ロマンの史跡～ 田中 清文 写真展
- 8月22日（火）～9月24日（日） 織田信長公 岐阜入城・岐阜命名450年記念 協賛事業
岐阜日本画協会創立30周年記念展 信長ゆかりの地を描く

■特集展示（2階 総合展示内）■

2階の総合展示の一角に特集展示室を設置し、1～2ヵ月ごとにテーマを設けて資料を公開しています。これからの日程は次のとおりです。

- 7月13日（木）～9月18日（月・祝） 魅せる・見せる鶴飼一近世から近代へー

■分室 原三溪記念室の展示■

原三溪ゆかりの人物や資料をテーマに、随時、一部展示替えをしています。これからの日程は次のとおりです。

- ～7月14日（金） 長良川鶴飼に向けられたまなざし
- 7月15日（土）～8月25日（金） 三溪の生家のくらし
- 8月26日（土）～10月6日（金） 三溪と漢詩

上記の日程は、都合により変更する場合がございます。ご了承ください。

研究ノート

『入水記録帳』を読み直す

—寛政10年の加納藩領の洪水・一揆・復興—

望月良親

はじめに

寛政10年(1798)12月26日、加納城下町(岐阜市)へ1,000人程の百姓が押しかけた。時間は午後7時頃、百姓の一揆勢が解散したのは、加納藩の役人との交渉を経た午前2時頃のことであった。

実は、この年には2度の大雨により長良川が溢れるなど、洪水が美濃国で頻発していた。そのため、年貢の減免を求めるために百姓たちは、城下町へ押し寄せたのであった。

この一揆の存在は、従来からよく知られており、例えば『岐阜市史 通史編 近世』(岐阜市、1981年)では、洪水の発生から一揆に至る過程などが、『入水記録帳』・『尾濃葉栗見聞集』などの史料から紹介されている。なかでも『入水記録帳』は、本一件に関して、まとまった記録として貴重な史料であり、豊富な内容が記されているとされる。

しかし、これまでは一揆へ至る過程のみに注目がされており、その後の対応の様子については十分に述べられてはいない。そこで、本稿では、『入水記録帳』を読み直すことによって、これまで言及されてきた一揆への過程のみならず、その後の様子にも留意し、災害から復興へ至る様子を明らかにし、一揆の歴史的な位置づけをより鮮明にしたい。

『入水記録帳』(徳川林政史研究所蔵、『岐阜市史 史料編 近世三』岐阜市、1979年)は、美濃国厚見郡上茜部村(岐阜市)にあった慈性院の多膳なる人物によって書かれた史料である。

1. 夢にも思わない洪水

『入水記録帳』の記述は、寛政10年3月末頃から洪水が「折々」に起こっていたということから始まる。一揆へ至る過程をみていこう。

4月7日には「大ニ」雨が降り、翌日には長良川の忠節村(岐阜市)の堤が切れ、続いて木曾川の米野(笠松町)などで6ヶ所、堤が切れたと記す。『入水記録帳』の作者・多膳を驚かしたのが、境川の2ヶ所の決壊であった。中西部村を流れている境川の東の堤が切れたのは「皆夢にも不存」と述べ、慈性院へはこれまで水が入って来たことはなく、「油断いたし」と多膳は書く。多膳にとって、まさに青天の霹靂であった。

多膳は、「ケ急に家内へ水の入を見て、驚片付候事故」と、慌てて家具などを二階へ運んでいる。慈性院の7人に加え、近隣の人びとも寺院へ避難をしており、合わせて25人が集まり、水が引くのを待った。翌日には、水が引き、それぞれ家に戻ったが、善右衛門と直吉は、屋敷が「潰かゝり」というありさまであったので、7日ほど寺院に留まり、帰った。洪水による、甚大な被害の一端が窺える。慈性院では、使用していた畳34畳の内、10畳が濡れて使えなくなり、8

畳は少しの濡れであったため、干して再利用をしたという。「俵物」は一週間かけて、干して乾かしていた。

他にも、加納城下町では、「魚屋口番所」、「廣江町橋」などが溢水により流れてしまい、中山道が通る三町目から五町目は、しばらく水が浸かったままであり、「大鵜飼船」で通行したと言う。下川手村(岐阜市)から笠松村(笠松町)の入り口までに行くのにも船を使わねばならず、1ヵ月後の5月24日まで船での移動は続いた。死者も当該地域には、多く出て、多膳は「死人夥敷事也」と書き残している。

このように甚大な被害をもたらした洪水であったが、「五月上旬」になると、堤の修復など復興の様子が見えてくる。木曾川の石田・無動寺・米野の堤では、毎日1,000人の人夫が集められ、修復が行われた。同月の16日には幕府の役人が見分に訪れ、23日に堤は完成した。田植えも同日から行われるなど、順調に復興は進みつつあった。



「墨引切入略絵図」(寛政10年(1798)上松家蔵)

寛政10年の洪水の様子を描いた絵図。画面中央が、「上茜部村」。東に黒色で境川沿いに堤が描かれるが、処々切れていることが分かる。赤色の線は、岐阜街道。

しかし、7月14日に、再び雨が美濃国を襲う。15日の夜には、「殊外大降り」となり、1時間後には、忠節村の堤が再度切れる。さらに、その上流である日野村(岐阜市)の北側の堤が切れ、上茜部村からさほど離れていない野一色村(岐阜市)まで水が達した。その勢いはとどまることを知らず、16日には、慈性院まで達していた。今回は、水の流れが遅かったため、先とは違い、一切を片づけることができ、水損を免れたと、多膳は記すが、29人が慈性院の二階に籠り、一夜を明かしていた。夜には水が引きはじめ、翌朝には庭の水も引き、17日の暮れには避難してきた人々もそれぞれ帰って行った。4月の大雨から僅か3ヶ月後のことであった。再度の洪水が襲った村々は、どうなったのであろうか。不穏な動きが見えてくる。

2. 1,000人の一揆勢

2度目の洪水から約2週間後の7月27日、「廿人・五十人或八百人程」といった百姓が、「加納・御園・岐阜」へ押し寄せたと多膳は記す。彼らが、村から町へ行ったのは、「困窮」のために、町の「大家」へ「無心」にいったのである。それが、3・4日ほど続いた。二度の災害は、百姓たちに大きなダメージを与えていた。

これに対して、領主たちは看過せず、押し寄せた百姓た

ちの内、「高持」へは「手錠村預」を命じた。無高の百姓のみならず、比較的安定していると考えられる高持までも「無心」を行わなければならないほどの被害があったのであった。

その後、不穏な状況は一旦治まったと考えられ、10月末になると幕府の命により、諸大名による「御手伝普請」がはじまった。修復ヶ所は美濃国一円に及んだが、加納藩領の「堤切所・水門」の修復のみにおいても、その見積金額は金1万1,000両に及んだと言う。

江戸から幕府の役人が到来し、修復ははじまった。上西部村の百姓たちは江崎村（岐阜市）の長良川の河原に行き「土持」に従事した。例年、「免割」（百姓への年貢の割付）は11月15日にははじまっていたが、このような状況であったため、「一切寸暇なく」、ようやく12月4日ころに畑方の年貢率が告げられた。それは、驚くべき内容であり、この災害下において、年貢率を引き上げるとのことであった。



「墨引切入略絵図」（寛政10年（1798）上松家蔵）

画面下の赤線が中山道であり、左下に加納城下町（部分）、左上に岐阜町が描かれる。右上の日野村の堤、約300間（約540m）が切れたのが本絵図中、最も長く切れた部分であり、溢れた水が城下町を襲った。

このような中、遂に一揆が起こった。先述のとおり、12月26日、江崎村の河原において1,000人ほどの百姓が集まり、加納城下町へ押し寄せたのであった。百姓たちは日暮れ頃から河原へ集まりだし、夜の8時頃に加納城下町の西端である九丁目に到着した。加納藩の役人は、鎮めようとしたが、多人数であったため、隣の八丁目まで進み、城へと彼らは歩を進めていった。これに対して、藩では「奉行」伊坂甚右衛門が騎乗にて、百姓たちに「一命」として事に臨んでいるので、鎮まるようにと述べたところ、1,000人の百姓たちは、「御白紙御免状」を要求した。しばらくの相談の後に、藩側は、田畑ともに年貢「皆無」の「御書付」を加納藩領の百姓たちに渡すことを約束した。一揆勢は、願いを勝ち取ったのである。

書付には「殿様」の判まで押してあったが、翌日に庄屋が藩の役所に呼び出され、役人から田畑両方の年貢免除を願っているのかと聞かれたところ、田方はすでに検見が済んでおり仕方がないが、畑方は先に免除を願っているので、畑方だけの免除を望むことを伝えたとする。この意見を踏まえ、結局、畑方の年貢免除のみということになり、一揆勢の望みが全ては叶うことはなかった。

3. 盗賊が徘徊する中の復興

このように畑方の年貢免除を勝ち得て、「騒動」は終息しつつあったが、翌日の27日から「雑兵五・六人宛」が、昼夜を問わず村々を見まわることとなった。不穏な空気が、まだ漂っていたのである。このような中、水門や堤の修復は進んでいき、翌正月5日には幕府の勘定奉行中川忠英たちが「雑兵五十人」を連れ、美濃国一円の工事の進捗状況を見分した。翌月末まで幕府役人は美濃国に滞在し、そのころには工事も漸く終ろうとしていた。

だが、2月27日の午前0時頃、おおよそ200人の百姓たちが、加納城下町へ再び「押懸」た。藩側では厳しく対応し、六町目において一揆勢を縛り、入牢を命じた者もいた。3・4日後には入牢者が13人となった。その後も調査は続き、4月には入牢者が30人にも及んだとする。引き続き不穏な状況が続いていることがこの記述からもわかる。

これに対して、領主側ではこのような厳罰化のみならず、他の対応策もとっていた。まずは、同年5月中頃から、加納藩では、「親孝行」の者と「貧窮者之者」へ「御救」を行いはじめた。上西部村では、「孝行人」浅七親子と「貧窮」伊右衛門親子に金子が与えられたと多膳は記している。

他にも、同年6月には盗賊の徘徊や放火が起きているので、美濃郡代から美濃一国において「夜廻」を厳重にし、用心するようにと命じられたことも多膳は記す。領主たちが、洪水にともなう混乱を何とか落ちつけようとしている様子がみえてくる。

このような対策は功を奏したようで、このころから『入水記録帳』への記述量は減少し、翌年の8月に風が吹いた際に、田方へ少し「障り」があったという記述があり、「右は珍鋪事故書留置候」と多膳は書き、記録は終わっている。

おわりに

寛政10年の洪水は、加納藩領において、甚大な被害をもたらした。その後の過程で藩と百姓の間で軋轢が生じる中で、復興へ歩を進めていたことをみてきた。この中で注目したいのは、最後に述べた寛政11年6月の美濃郡代からの指示である。ここでは、多膳が、この指示を一連の洪水・一揆に連なるものであるという認識が重要である。この指示とは、美濃郡代鈴木門三郎が出した触を指すものであると考えられ、この触はすでに、『各務原市史 通史編 近世・近代・現代』（各務原市教育委員会、1987年）において紹介され、筆者も若干の指摘を行っている（『葵の時代』岐阜市歴史博物館、2016年）。本触の背景には、一揆があるのではないかと先にも言われていたが、その実証はなかった。しかし、本検討により、少なくとも当該期に相互は関連するものであるという認識があることは判明した。さらに、この触は、治安対策のために幕領・私領を問わずに、組合村の結成をも指示したものであり、美濃のような領主の錯綜地域を支配するためには、大きな意味をもっていたと考えられる（『葵の時代』）。一揆の過程には、無論注目をする必要があるが、今後はその後の過程まで踏まえ、相互の関連を問うべきである。『入水記録帳』の史料批判など、今回扱った史料に関してのみでも課題は多くあるが、ひとまずここで擱筆したい。

***** 館蔵資料紹介 *****

雪下胴具足

吉田コレクション

鉢高14cm・胴高43cm・袖長24cm・草摺長31cm

蝶番で縦五枚矧ぎした胴が特徴で、伊達政宗（1567～1636）が愛用し、臣下に広めたことでも知られています。東北会津の雪下鍛冶が製作したことから、「雪下胴」と呼ばれています。

東北の伊達家や九州の鍋島家、四国の山内家では、江戸時代を通じて、その型式を踏襲した具足が作られました。この作品も、江戸時代後期に作られた「復古調の甲冑」で、胴の胸あたりには本歌になかった両乳環が見えます。

通常雪下胴はすべて鉄で作り、非常に重たいものですが、この作品は牛革を数枚重ねて膠などで固めた練革製の軽量なもので、防御性より着易さを優先したものとイえるでしょう。練革製の具足は経年変化で形が崩れてしまうことも多いのですが、この作品に歪みはみられず、作柄はきわめて優秀です。大名道具であった可能性もあるでしょう。

鎧・兜・袖の他、籠手や脛当などの小具足がほぼ揃っていますが、現在付随する越中臈当は当具足に不釣り合いで、別物が混ざった可能性も指摘されています。

岐阜県博物館協会理事などを歴任された甲冑研究者故吉田幸平氏が収集しご遺族から寄贈をうけた資料のひとつです。



利用の御案内

- **開館時間** 午前9時～午後5時
(入館は午後4時30分まで)
 - **休館日** 7/3(月)・10(月)・24(月)・31(月)
8/7(月)・21(月)・28(月)
9/4(月)～7(木)・11(月)・19(火)・25(月)
 - **観覧料** (団体は20人以上)
歴史博物館総合展示、加藤栄三・東一記念美術館
高校生以上 300円 (団体240円)
小中学生 150円 (団体90円)
両館共通で観覧される場合
高校生以上 510円 (団体410円)
小中学生 250円 (団体150円)
 - ④家庭の日 (毎月第3日曜日)に入館する中学生以下の人と同伴する家族 (高校生以上)の方
企画展は、総合展示料金でご覧いただけます。
特別展は、その都度料金を定めます。
 - **交通案内** JR岐阜駅・名鉄岐阜駅から岐阜バスにて長良方面行きに乗り、「岐阜公園歴史博物館前」で下車、すぐ東に歴史博物館があります。
岐阜公園内ロープウェー乗り場すぐ隣に加藤栄三・東一記念美術館があります。
- ◎下記の方は無料でご観覧いただけますので、①②の方は証明できるものをご提示ください。
①岐阜市在住の70歳以上の人
②身体障害者手帳、精神障害者保健福祉手帳、療育手帳の交付を受けている人、およびその介護の方1人
③岐阜市内の小中学生

博物館だより No.96 2017. 6
編集・発行 岐阜市歴史博物館
〒500-8003 岐阜市大宮町2-18-1 ☎058(265)0010
(分館) 加藤栄三・東一記念美術館
〒500-8003 岐阜市大宮町1-46 ☎058(264)6410